

天龍山石窟第九窟の千仏表現について

神谷麻理子

On the thousand-buddha Sculptural Grouping of Tian Long Shan Grottoes cave IX

KAMIYA Mariko

Tian Long Shan Grottoes, which were built during the Eastern Wei Dynasty or the Northern Qi Dynasty, have a total of twenty five caves and more than half of them seem to have been built during the Tang Dynasty. Most of them are small only about two meters deep and each is coordinated with five, three, or two image statues at each of the north, east and west walls. The north wall is considered the main wall. However, only the cave IX at the center of the caves, is different from the others, the principal image of the sculptural grouping in the ninth cave is the big Buddha statue of Maitreya, there is also a bodhisatva statue of the Ekadasamukha, and a bodhisatva statue of Manjusri and a bodhisatva statue of Samantabhadra. These

statues were carved later than the cave statues themselves, and, there are several Tathagata statues sitting on lotuses, in other words, a thousand Buddha are carved in relief on the back wall, it seems that they were sculpted after the initial the excavation of the caves during the Tang Dynasty. The Lotus seats of the Tathagata statues have intertwined lotus stem, and this is a very unusual thousand Buddha image. However, in spite of the very peculiar iconography, there has not been detailed discussion on this so far. It is not an exaggeration to say that the cave IX itself has been disregarded. I would like to discuss the thousand Buddha sculptural grouping carved in the cave IX and to consider what theme the image indicates.

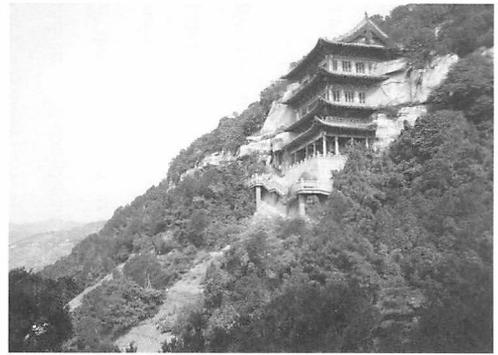


図1 天龍山石窟第九窟（漫山閣）外觀

三尊ないしは二尊を配する構造をもつが、石窟の中心に位置する第九窟のみは異例で、巨大な窟の内部を上下二層に分け、上層に本尊弥勒如来、下層に十一面観音菩薩、文殊菩薩、普賢菩薩を配する。そして、窟の外壁には木造楼閣を設け、本来の仏教寺院としての、信仰の中心を担っている。

ところで、下層の後壁には、蓮華座上に坐す千仏像が全面に浮彫りされている（以下「後壁千仏」）。千仏の各蓮華座は、蓮茎によって互いに連結した珍しい図像であり、これらは「千仏」というよりも、むしろ「化仏」と呼ぶべきなのかも知れない。

この特異な図像については、これまで弥勒如来を中心とした過去仏、あるいは弥勒浄土、もしくは第九窟諸像の構成から『華嚴經』との関連といった簡単な指摘はあったが、いずれも具体的に論じられたものはなく、第九窟そのものについても軽視されてき

た。本稿では、これらの千仏表現をあらためて紹介し、どのような背景で制作されたのか、若干の考察を試みたい。

一 第九窟及び後壁千仏の概要

現在漫山閣と呼ばれる第九窟外壁の楼閣（図1）は、一九八〇年代に再建されたものであるが、『太原縣志』によると、明の正徳年間（一五〇六〜二一）初め、僧浄深が天龍寺（石窟）を重修し、僧道永が石仏を庇うために、高さ四丈余りの楼閣を建てたことが知られる¹⁾。

また、今ある楼閣は初層に裳階を設けた三層であるが、石窟内部は二層構造で、上層は総高約七mの塑造の弥勒如来倚像を、下層中央は十一面観音菩薩立像、その左に騎象文殊菩薩坐像、右に騎獅普賢菩薩坐像を配する。問題の千仏は、下層の後壁に浮彫り



図2 第九窟下層十一面観音菩薩立像及び後壁千仏

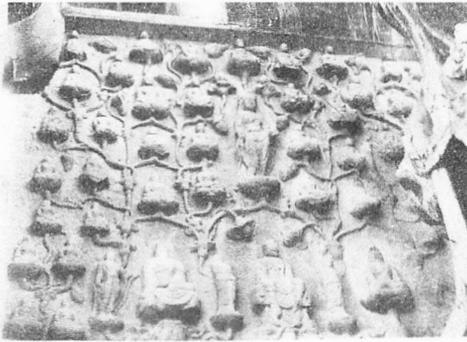


図3 東側区画の後壁千仏（旧状）

右側の如来坐像の像高は約三三cm。偏袒右肩の衣を纏い、左側の如来坐像と同様、左手を腹前に、右手を右膝に置く。やはり丸い蓮根から茎を伸ばした蓮華座上に結跏趺坐し、同じく右側に菩薩立像、左側には比丘像らしき脇侍を配する。そして、左右の如来坐像の背後からは上部へ蓮茎が

されており、ちょうど十一面観音菩薩を挟む形で、東西二区に分けられている（図2）

後壁千仏東側の区画（図3）は、高さ約一・八m、幅約二・六m。最下部には若干大きな三仏（中央に如来倚像、左右に如来坐像）を配し、左右の如来坐像に各二体ずつ脇侍を置く（七尊構成）。その中尊の像高は約四〇cmで、両手を両膝に置き、須弥座上に倚坐する。垂下した両足は、丸い蓮根から蓮茎が伸びた踏割蓮華の上にのせる。

左側の如来坐像の像高は約二八cm。左手を腹前に、右手を右膝に置く。蓮華座上で結跏趺坐し、その蓮華は蓮根から垂直に伸びている。また、蓮根は丸く、左右両脇侍が立つ蓮華座へも茎を伸ばしている。右脇侍は不鮮明、左脇侍は失われているため像容は分からない。



図4 西側区画の後壁千仏

あり、中央に如来倚像、左右に如来坐像を配する。如来倚像の像高は約四一cm、左側の如来坐像の像高は二三cm、右側の如来坐像は二六cm。いずれも東側の区画とほぼ同様であるが、右側の如来坐像が両手を腹前辺りに置くこと、左右如来坐像ともに、周囲の蓮華座上の如来坐像が脇侍のように配されている点など、若干の違いも見られる。中央の如来倚像の上にはやはり大きめの如来立像の姿が見られる。そして、蓮茎で繋がった蓮華座上の如来坐像は六十（ないしは六十二）を数える。

後壁千仏は全体的に表面が摩滅し、中には欠失した部分もあるため詳細ははっきりしないが、以上が大まかな形状の概要である。¹²⁾

なお、僅かではあるが諸先学における後壁千仏についての一応の言及があるので、ここで紹介したい。まず、田中俊逸氏は、蓮

幾重にも伸び、蓮華座を設ける。それらの蓮華座は五十四（ないしは五十五）あり、各々如来像が坐る。また、下部中央の如来倚像の上には、現在は欠失するが、やや大きめの如来立像があった。

後壁千仏西側の区画（図4）は、高さ約一・八m、幅約二・三m。東側と同様、下部にやや大きめの三仏が

茎で繋がったこれらの千仏表現を「化仏」と解釈し、「形式は所謂六朝の枝仏と称しているものに相当するが、仏の面貌姿態、衣褶皺襞、さては蓮弁の彫法に一種の改革進歩した点は初唐頃と見ても大過はなからう」と述べられた。¹³⁾

また、松本榮一氏は、『集神州三寶感通録』や『覺禪鈔』にみえる阿弥陀五十菩薩図に関連する作例として、「天龍山石窟第九洞外陣北壁に於ける初唐頃の浮彫であるが、これ亦一佛五十菩薩の傳説と關係あるものと考へられ、圖様の著しく西方的なる點は、これ亦西方傳來の圖本に基きて作られし事を語れるものと言ふべきであらう」とした。¹⁴⁾

一方、水野清一氏は「第一層の後壁にある千佛の浮彫は、初唐の作である。したがって、本尊彌勒石像はもつとはやくつくられたかも知れないが、現存する像は塑造で、五代の作であらう」とし、千仏の主題については「彌勒佛を中心とした過去佛の表現ではないかとおもふ」としている。但し、注にて「龍門萬佛洞の後壁にある五通菩薩の一佛五十菩薩の類例中にかぞへたが、どれも佛の像であること、中央に彌勒佛があることなどによって、別の解釋を求める方がよいやうにおもふ」と、前掲の松本榮一氏の見解とは異なり、これらの千仏の圖像が特異であることを、それとなく提起している。¹⁵⁾

そして、李裕群氏は「彌勒淨土を表現したものであろうが、東側区画の中尊彌勒如来倚像上に菩薩像、西側区画にも如来立像があることから、西方淨土の阿弥陀と觀音に關係があるのかも知れない」とし、さらに「このような圖像と題材は未見である」と結

んだ。¹⁶⁾

第九窟千仏について、おおよそ共通した見解としては、制作年代が初唐頃であるということ、浮彫の最下部の倚像は、彌勒如来であるということである。第九窟の具体的な造営年代は今後検討を要するが、本稿では一応唐代ということを進めたい。また、現在の第九窟本尊である塑造の彌勒如来倚像は、後世の作と認められるため、まずは当初の本尊も彌勒如来であったかどうかを、今一度確認したい。

天龍山の麓に建つ聖壽寺には、天龍山石窟に關係するいくつかの碑像を所蔵しているが、その中に「大漢英武皇帝新建天龍寺千佛樓之碑」なるものがあり、廣運二年（九七五）八月二十一日に建てられたことが記される。その文中に、「奇峰嶮口上有平址、東西僅五十步、北倚石壁、有彌勒閣、内設石像」とあることから、¹⁷⁾五代北漢（九五—七九）の頃には、すでに彌勒如来が安置されていたことがうかがわれる。原初の彌勒如来像がどのような理由で失われたのかは不明であるが、途中、本尊がすり替わったとは考えにくいことから、恐らく造営当初から彌勒如来を本尊とするか、もしくは彌勒に關係した窟として造られたと思われる。従って、東西区画に分かれた問題の後壁千仏も、彌勒信仰に関連して制作されたものと見なしてよからう。

二 千仏表現について

中国における千仏への関心は「東晋以後、『賢劫經』をはじめと

する諸種の仏名経の伝訳、撰述があり、同時に仏名を唱礼して懺悔滅罪を祈る仏名会が各地で行われたことが考慮され、その間の信仰の高まりが窺われる」との指摘があり、かなり早い時期から広まっていたと考えられる。造形としては、五世紀前半の石窟寺院の壁面に登場しており、その後も、絵画、彫刻（浮彫）という形で、石窟のみならず、単独造像においても各地で制作されてきた。だが、それはあくまで本尊を荘厳する役割に留まり、千仏そのものが主題になることはなかった。

千仏の成立経緯については、あまりはつきりしないが、安田治樹氏は千仏の種類を、大きく「過去仏説」「賢劫仏説」と「化仏説」に分けている。⁽⁹⁾

過去仏は、釈迦以前にも無数の過去仏がいるという考え方で、最も知られているのが『長阿含経』巻第一「大本経」や『増一阿含経』第四十四、四十五などに説かれる「過去七仏」である。さらに過去に対して現在、未来の概念が生れ、やがては「二世多仏」説が出て、そして、『観葉王葉上二菩薩経』のように、過去、現在、未来の三世において各千仏が存在するという「三劫三千仏」説が唱えられるようになるという。

続いて「過去仏」の発展にともない「賢劫仏」の考え方が出現する。賢劫仏は、過去、現在で出世した仏から、未来仏である弥勒にいたるまで、千仏が次々と現れるという考え方から成立したもので、次第に名号を記した仏名経類が訳出されるようになっていく。⁽¹⁰⁾

また、「化仏」の考え方は、釈尊の奇蹟譚「舍衛城双神変」に基

づくもので、「神変」についてはいくつかの教典が述べている。中でも、化仏の出現について注目すべき記載があるのが、後秦鳩摩羅什訳『大智度論』巻第九で、⁽¹¹⁾ 仏の一切の毛根から光明が発せられ、十方無量世界を照らし、隣辺から宝蓮華を出したとし、次のような偈を説いたとする。

青光瑠璃莖 千葉黄金色／金剛爲華臺 琥珀爲華飾
莖軟不籠曲 其高十餘丈／眞青瑠璃色 在佛臍中立
其葉廣而長 白光間妙色／無量寶莊嚴 其華有千葉
妙華色如是 從佛臍中出／是四華臺上 寶座曜天日
座各有坐佛 如金山四首／光曜等如一 從四佛臍中
各出妙寶華 華上有寶座／其座各有佛 從是佛臍中
展轉出寶華 華華皆有座／座座各有佛（以下略）

さらに、唐義浄訳『根本一切有部毘奈耶雜事』巻二十六には、⁽¹²⁾ 時彼龍王知佛意已。作如是念。何因世尊以手摩地。知佛大師欲現神變須此蓮花。即便持花大如車輪數滿千葉。以寶爲莖金剛爲鬚。從地踊出。世尊見已即於花上安隱而坐。於上右邊及以背後各有無量妙寶蓮花。形状同此。自然踊出。於彼花上一皆有化佛安坐。各於彼佛蓮花右邊及以背後。皆有如是蓮花踊出化佛安坐。重重展轉上出乃至色究竟天蓮花相次。或時彼佛身出火光。或時降雨。或放光明。或時授記。或時問答。或復行立坐臥現四威儀。

仏が神変を現そうとする意を知った龍王は、地より湧出した蓮華を支える。その上に仏が坐し、さらに左右背後から無量の宝蓮華が自然に湧出する。それらの上には化仏が安坐し、重重展転し



図7 方形独尊佛
(奈良国立博物館)



図6 三尊及び七蓮仏像
(西安市文物保護考古所)



図5 アジャンタ石窟
第七窟仏堂前室の浮彫
(部分)

ながら色究竟天まで伸びる。化仏は身から火光を出し、ある時は雨を降らせ、あるいは光明を放ち、ある時は授記し、ある時は問答し、そしてある時は四威儀を現す——という。

これら經典に記される、いわゆる「神変」で出現した化仏を画像化したものは、アジャンタ石窟第七窟仏堂前室の左右壁の浮彫を初め(図5)、西安市大慈恩寺出土《三尊及び七蓮仏像傳》(西安市文物保護考古所)(図6)や、《方形独尊佛》(奈良国立博物館)(図7)などの例がある。これらは蓮茎が互いに連結し、展転する蓮華座上に、それぞれ仏が坐る点で、まさに天龍山石窟第九窟の後壁千仏に共通するということができ、**「神変」の主役はあくまで釈迦如来であるため、直接結びつけることは難しいかも知れない。**アジャンタ石窟第七窟浮彫の例は、龍王の支える茎から各蓮華座が派生しているところが、後壁千仏とは大きく異なるが、傳仏二例はともに丸い蓮根から蓮茎が伸びており、後壁千仏に近いといえよう。この二例は唐代、アジャンタ石窟第七窟は、アジャンタの最末期、七世紀前半頃の作と考えられている。

一方、蓮華座上に坐る尊格が、仏と菩薩という違いがあるものの、前掲の阿弥陀五十菩薩図も、非常に類似した図像ということとで注目に値する。その典拠となる『集神州三寶感通録』巻中「隋釋明憲五十菩薩像縁三十七」⁽¹³⁾は、麟徳元年(六六四)、道宣によってまとめられたもので、天竺鷄頭摩寺五通菩薩が、阿弥陀に樹葉上で一仏五十菩薩の姿を現すことを請い、その姿を写し取って流布したという故事を収めている。本図像については、勝木言一郎氏の論考があり、⁽¹⁴⁾ここでは主な中国の作例として、臥龍山千仏巖

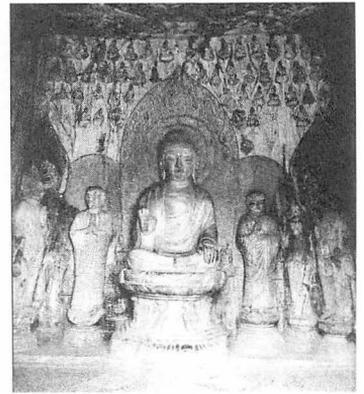


図8 龍門石窟萬佛洞西壁

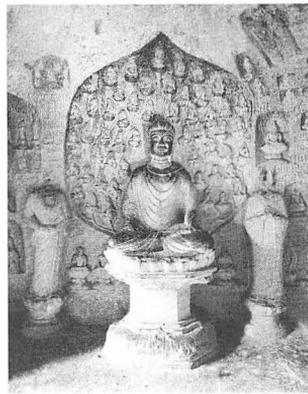


図9 浚県千佛洞石窟第一北壁
(中尊頭部は後補)

(貞観八年・六三四)

をはじめ、綿陽碧水

寺摩崖造像(唐)、通

江千仏崖阿彌陀仏龕

造像(龍朔三年・六

六三)、龍門石窟敬善

寺洞像(唐・高宗前

期)、同石窟萬佛洞像

(永隆元年・六八〇)

(図8)、浚県千佛寺

石窟造像(唐)(図9)、

敦煌莫高窟第三三二

窟東壁画(聖曆元年・

六九八)等をあげて

いる。

千仏表現そのもの

は早くから成立し、各地で造像されてきたことは既に述べたところであるが、以上の現存作例の制作年代から、蓮茎で繋かれた蓮華座に坐す千仏ないし化仏の表現、すなわち「神変」及び「阿彌陀五十菩薩」に関係する図像は、唐代、しかも七世紀中頃から末期の初唐を中心に、特に好まれ造像されたのではないかと考える¹⁵⁾。

三 唐代の彌勒如来像と千仏

中国における彌勒諸經典の漢訳は二世紀頃から始められ、四五世紀頃、隆盛を極めたといわれる。彌勒信仰には大きく上生信仰と下生信仰があり、上生信仰が死後彌勒菩薩が住する兜卒天へ生まれたいと願う信仰であるのに対し、下生信仰は遠い未来、彌勒が閻浮提へ下生して、成仏後に龍華樹の下で三回の説法を行う「龍華三会」へ値遇することを願う信仰である。

下生信仰が流行した唐代、彌勒如来は倚像で表されることが多かった。当時、窟の造営が盛んに行われた龍門石窟では、紀年銘のある彌勒の造像は十七件あり、倚像の代表例としては、惠簡洞本尊(咸亨四年・六七三)を始め、破窯の正壁像(貞観十一年・六三七)や、賓陽南洞北壁像(貞観二十二年・六四八)などが上げられる。また、萬佛洞通道南側の窟内彌勒如来倚像の銘文には、永隆元年(六八〇)、處貞が「彌勒像五百區」を敬造したことが記され、壁面には五十一の倚坐する彌勒小千仏が彫られている。さらに、武周期(六九〇―七〇四)の造営とされる擂鼓台中洞(大万伍千仏龕)の本尊も、左右に菩薩立像を配した彌勒如来倚像で、窟内四壁中段から天井に至るまで、周囲を千仏で埋め尽くしている。これらの像は、七世紀後半、彌勒如来倚像と千仏を構成する好例であるといえよう。そのほか、同石窟敬西洞では、彌勒如来倚像を中尊に、五十菩薩を壁面に表す。但し、これらの菩薩像が坐る蓮華座は、前掲の阿彌陀五十菩薩図のように、蓮茎で繋がない。

一方、弥勒如来像と千仏との組合せを述べる経典として、鳩摩羅什訳の『弥勒大成仏経』⁽¹⁷⁾があり、そこには、

佛滅度後比丘比丘尼優婆塞優婆夷。天龍八部鬼神等。得聞此經受持讀誦禮拜供養鵜恭敬法師。破一切業障報障煩惱障。得見彌勒及賢劫千佛。三種菩提提隨願成就。不受女人身。正見出家得大解脫。

仏滅の後、本経典を聴き礼拝供養して、一切の業障・報障・煩惱障を破すれば、弥勒如来と賢劫千仏にまみえ、出家して解脱を得ることが説かれる。そして、劉宋沮渠京聲訳『観彌勒菩薩上生兜率天経』にも、仏滅後、弥勒に随つて閻浮提に下り、第一に法を聴いて、未来世で賢劫の一切諸仏に値遇することが説かれている。⁽¹⁸⁾つまり、未来仏である弥勒如来の出現には、千仏がともなるのである。⁽¹⁹⁾

以上を考えると、前掲でふれたように、天龍山石窟第九窟後壁千仏の下部に浮彫りされた中尊の如来倚像は、東西区画ともに、やはり弥勒如来で、左右の二仏は、未来仏である弥勒如来に対して表された現在仏、過去仏、すなわち三世仏としてほぼ間違いないといえよう。中尊弥勒如来倚像の上部に立つ如来像も、過去仏の一体と見て良いのかも知れない。そして、周囲の千仏は、弥勒如来に付随する千仏のみならず、過去仏から未来仏の出現に至るまでの、賢劫の間に相繼いで現れるという千仏の存在も含み、表現されたものと考ええる。⁽²⁰⁾

但し、弥勒如来、もしくは三世仏にともない出現した千仏が、蓮華で繋がれた蓮華座上に坐するという例は、他には見当たらず、

はつきりとした典拠も分らない。なぜ、天龍山石窟第九窟の後壁千仏に、区画内に整然と並んだ通例の千仏の表現ではなく、このような特異な表現を用いたのであるうか。それには、七世紀中頃から末期の初唐頃に流行した「神変」や「阿弥陀五十菩薩」の化仏の図像が大きく影響しているのではないかと思われる。「神変」の図像はインド、「阿弥陀五十菩薩」の図像もインド・西域伝来であるという。⁽²¹⁾西域様式を積極的に取り入れた天龍山石窟ならではこそ、弥勒如来を荘嚴するにあたって新しい千仏表現を試みたのではないだろうか。それらの表現が、天龍山石窟唐代造営期における弥勒信仰に取り入れられ、採用されたのではないかと考えたい。

おわりに

以上、天龍山石窟第九窟の後壁千仏は、弥勒如来を中心とした三世仏にともない出現した千仏で、その表現には七世紀中頃から末期にかけて流行した、蓮華で繋がれた蓮華座に坐す化仏、ないしは千仏の図像が影響した可能性を指摘した。この時期は、ちょうど則天武后が権勢を振るい、やがて武周を建国する頃と重なる。弥勒下生信仰を政治に利用し、その信奉にも積極的であった則天武后の影響が、弥勒如来の造像に拍車をかけたのであろう。なお、天龍山石窟の唐代造営に、則天武后が関与したという具体的な史料はないが、石窟の所在地である太原が唐国の発祥地、つまり「太原起義」の地であること、則天武后の出身が太原からさほど距

離を置かない文水の地であることを考えると、天龍山石窟の造営に何らかの関与があったとしても不思議ではない。実際、第九窟以外の唐代窟にも、弥勒如来と思しき倚像は数多く見られる。

本稿では、後壁千仏の主題の考察に留まるのみで、制作年代、つまりは窟の造営年代については具体的に提示しなかった。筆者は天龍山石窟唐代窟の造営年代の始まりを、八世紀に入ってからと考えている。⁽²⁾従って、第九窟の造営年代については、今後慎重に検討したい。

注

- (1) 『太原縣志』巻一(『天一閣藏明代方志選刊』八、上海古籍書店、一九八一年より)。
天龍寺(中略) 正徳初僧淨深重修僧道永又建閣高四丈餘以庇石佛像
- (2) 後壁千仏の像容については、李裕群・李綱『天竜山石窟』(北京科学出版社、二〇〇三年)を参考とした。
- (3) 田中俊逸「天龍山石窟調査報告」(『佛教学雑誌』第三巻第四号、一九二二年)。
- (4) 松本榮一『燉煌畫の研究』圖像篇(東方文化学院東京研究所、一九三七年)。さらに、中村興二氏も松本氏の見解に賛同し、燉煌莫高窟第三三二窟に描かれた阿弥陀及び五十菩薩淨土図に関連する図柄として第九窟の千仏を取り上げ、蓮華化生と考えている(「わが国の淨土変相と敦煌」(『中国石窟 燉煌莫高窟三』平凡社・文物出版社、一九八一年)。

(5) 水野清一・日比野丈夫『山西古蹟志』(京都大学人文科学研究所研究報告、一九五六年)。

(6) 前掲注(2)、李裕群・李綱『天竜山石窟』。

(7) 常盤大定・関野貞『支那佛教史蹟』第三集評解(佛敎史蹟研究會、一九二六年)。

(8) 安田治樹「千仏図について」(『大和文華』一〇六号、二〇〇一年)。

(9) 前掲注(8)、安田治樹「千仏図について」。

(10) 仏名経類の中でも、賢劫千仏の名号を一一記すのは『賢劫経』八巻、『現在賢劫千仏名経』一卷、三十巻本『仏名経』に限られ、他は賢劫に

千仏の興隆があることを述べるにすぎないという(前掲注(8)、安田治樹「千仏図について」)。

(11) 『大正蔵』巻二五。

(12) 『大正蔵』巻二四。

(13) 『大正蔵』巻五二。

(14) 勝木言一郎「中国における阿弥陀三尊五十菩薩図の図像について——臥龍山千佛巖の作例紹介とその意義——」(『仏教芸術』二一四号、一九九四年)。

(15) 龍門石窟萬佛洞中尊は、阿弥陀如来でなく釈迦如来とする説がある。その場合、正壁の化仏は十方の一切諸仏とみなされる。

なお、宮治昭氏は、阿弥陀五十菩薩図は「舍衛城の神変」の図像に近いとし、「両者はともに蓮の増殖のイメージに基づいている」としている(『仏教美術のイコノロジー インドから日本まで』吉川弘文館、一九九九年)。

(16) 劉景龍・李玉昆主編・龍門研究所『龍門石窟碑刻題記彙録』上巻、

中国百科全書出版社、一九九八年。

(17) 『大正蔵』巻十四。

(18) 『大正蔵』巻十四。

(19) 弥勒と千仏の関係については、宮治昭氏の論考がある（バーミヤール石窟の天井壁画の構成——弥勒菩薩・千仏・飾られた仏陀・涅槃図——『仏教芸術』一九九〇年）。

(20) 賀世哲氏によれば、北朝石窟の千仏の名称については様々な意見が出ており「賢劫千仏にいたっては、北朝時代の石窟において、私は確実な文字による記載をいまだひとつも見いだしていない」とし、「仏名については、過去荘嚴千仏、未来星宿劫千仏、五十三仏、三十五仏、百七十仏および釈迦化身仏などがある。（中略）『千仏』とは、仏の数が非常に多いことを意味し、仏名経中に説かれる過去、現在、未来十方三世尽虚空界一切諸仏および各種化仏が包括されているのである」とされている。従って、後壁千仏の名称も、「賢劫千仏」と決めるには検討を要するであろう（北朝石窟における千仏圖像の諸問題について「八木春生訳、『仏教芸術』一九九〇年、一九九〇年）。

(21) 前掲注(4)、松本榮一『燉煌畫の研究』圖像篇、前掲注(5)、宮治昭『仏教美術のイコノロジー——インドから日本まで』。

(22) 拙稿「天龍山石窟考——唐代窟を中心に」（二〇〇七年度『鹿島美術研究』年報第二十五号別冊、二〇〇八年）。

〔挿図の引用〕

〔図1〕筆者撮影。

〔図2〕李裕群・李綱『天龍山石窟』北京科学出版社、二〇〇三年、カラー

図四五。

〔図3〕松本榮一『燉煌畫の研究』圖像篇、東方文化學院東京研究所、一九三七年、挿図一三三。

〔図4〕前掲〔図2〕、カラー図四七。

〔図5〕高田修・田枝幹宏『アジャインタ 石窟寺院と壁画』平凡社、一九七一年、図一四〇。

〔図6〕『唐の女帝・則天武后とその時代展』展覧会図録、東京国立博物館・NHK編、一九九八年、図一〇七。

〔図7〕『西遊記のシルクロード 三藏法師の道』展覧会図録、奈良県立美術館ほか、朝日新聞社、一九九九年、図一五六。

〔図8〕『中国石窟 龍門石窟二』平凡社・文物出版社、一九八八年、図

六四。

〔図9〕『中国石窟雕塑全集 第六卷 北方六省』重慶出版社、二〇〇二年、

図七四。

〔付記〕

本稿は、鹿島美術財団二〇〇七年度研究助成「天龍山石窟考——唐代窟を中心に」の成果の一部を含んでいる。